

## ヴァン・ダイク作《ペンブルック伯爵の家族肖像》再考 —初期ステュアート朝宮廷仮面劇との関連を中心に

二宮洋輔

第4代ペンブルック伯爵フィリップ・ハーバートの長男チャールズと、バッキンガム公爵ジョージ・ヴィリアーズの長女メアリーとの結婚を記念して制作された《ペンブルック伯爵の家族肖像》(1635年頃、ウィルトン・ハウス)については、その構図や色彩の点から、これまでヴェネツィア派画家、なかでもティツィアーノからの影響が言われてきた。併せて、本作に対しては、単なる家族肖像に留まらない「野心的な歴史画」と評したクリストファー・ブラウンをはじめ、複数の研究者が、ある種の演劇的性格を認めている。では、その歴史画的・演劇的性格が、「結婚」を主題とした「家族肖像」である本作に付与されることに、どのような意義があったのか。また、その背景には、委嘱主のどのような期待があったのか。従来の研究では検討が尽くされずにいたこれらの問いから出発し、宮廷の内外に向けて広く発信力を有した「仮面劇 (masque)」との関連を通じて、作品全体の意味を探ることが、本発表の目的である。

既に指摘されているように、モデルの頭上に紋章を掲げる本作の構図については、《ヘンリー8世の家族肖像》(1545年頃、ロイヤル・コレクション)をはじめ多くの先例がある。ここで重要なことは、紋章が家門の正統性と権威を表明する機能をもち、それが同時に、結婚によってもたらされるハーバート家の輝かしい未来を象徴している点である。当時の宮廷仮面劇では、国王夫妻の美德と愛がもたらす王国の安定と繁栄が中心的な主題となり、それらは「人生の鏡 (the mirros of man's life)」、すなわち宮廷の人々が倣うべき理想像として提示されていた。宮廷の催事を監督する「侍従卿 (Lord Chamberlain)」の職にあり、舞台に立った経験ももつペンブルック伯が、仮面劇の説く規範に対する応答の証として、本作を構想した蓋然性は高い。

そもそもチャールズとメアリーとの結婚は、第3代ペンブルック伯とバッキンガム公との、国王や議会をも巻き込んだ、長年にわたる対立を解消するための切り札として約束されたものであった。ここには、「混沌」の末にもたらされる「秩序」という、仮面劇の典型的な筋書きとの類似が看取できるだろう。さらに、仮面劇の舞台監督を務め、ヴァン・ダイクも高い関心を寄せていたイニゴー・ジョーンズは、「秩序」を表現するにあたり、ウィトルウィウスやパッラーディオなどから学んだ古典主義建築を象徴的に用いたのである。当時の観者たちは、本作に描かれた建築構造に、仮面劇的演出の反響を敏感に察知することができたに違いない。

ヴァン・ダイクに対しては、これまでヴェネツィア派絵画からの影響ばかりが強調され、それ以外の要素は副次的なものとして扱われることが多かった。しかし、本発表が提示する仮面劇との関連は、こうした捉え方が一面的なものに過ぎないことを示すとともに、肖像画と歴史画の融合という、画家による野心的な試みがもたらした成果を明らかにしてくれるだろう。